

2018年度自己点検評価（システム理工学部語学部会）

語学部会
主査 吉村建二郎
真保晶子
深谷修代

目次

1. 教員・教員組織
2. 教育内容・方法・成果
3. 学生の受入れ
4. 学生支援

1. 教員・教員組織

語学プログラムを担当する語学部会は英語担当の専任教員2名と特任教員1名からなり、学部の語学教育を推進している。さらに、英語担当教員のいない学科から3名、学部長室から1名加えた語学ワーキンググループで、3,4年生の英語力向上などの授業科目外を中心とした語学プログラムのサポートをしている。

2017年度と2018年度は英語の授業は、上記の語学部会の専任教員3名に非常勤講師13名と特任講師2名を加えた18名で行った。1年生の英語担当には一般英語の英語教育の経験のある教員を採用し、2年生の英語担当には可能な限り理工系英語の英語教育の経験のある教員を採用できている。

英語担当の非常勤講師に対して、2017年度が始まる前の3月に説明会を行い、カリキュラムの説明、意思疎通と理解の共有化を図った。授業方法についての意見交換の時間ももうけ、本学の学生への有効な英語教育法について、実践的なアイデアや情報が交わされた。2018年度が始まる前は、カリキュラムの変更も軽微で、新規の採用非常勤講師が2名と少なかつたため、説明会は開催せず、資料の送付で新年度に向けた連絡事項を伝達した。

第二外国語担当非常勤講師は6名おり、教える言語のネイティブか、ネイティブに近い日本人講師を配し、学生にとって初めての言語を教えるのに適した経験豊かな講師陣となっている。

2. 教育内容・方法・成果

芝浦工業大学では、グローバル化した社会から学びグローバル化した社会に貢献できる人材の育成を目指し、以下のように3つのポリシーを述べている（根拠資料：大学ホームページ）。すなわち、アドミッションポリシーでは、「我が国と世界の持続的発展に貢献」しようという意志をもち、「人類の進歩と地球安全の保全に尽くす」気概をもつ学生の入学を求めている。カリキュラムポリシーでは「世界と社会の中で自律的・主体的に活躍し、世界に貢献できる技術者を育て」ることを教育の目標とする技術者像としている。さらに、ディプロマポリシーでは「世界の諸問題を解決できる」能力を得たものに学位を授与するとしている。これらのポリシーにしたがって世界に貢献することができるためには、世界のさまざまな国の人々とコミュニケーションできる能力を備えていなくてはならない。システム理工学部では、世界の共通言語としての英語、および、英語圏以外の多様な国の人々とのコミュニケーションツールとしての第二外国語の教育を行っている。

近年、就職後や大学院進学後に役立つような英語力、本学部の場合は理工系人材育成として必要な英語力を育てるのに適した語学カリキュラムへの期待が強くなっている。さらに、就職活動時及び大学院進学時等に語学検定試験スコアの提出を要求される場面が増えているため、実用的な英語能力を育むカリキュラムの必要性も学生から聞かれるようになってきている。

こうした背景から、2012年1月に学部長より語学カリキュラムの強化の要請が出され、「語学教育に関する将来像検討委員会」（以降、「検討委員会」）が発足した。最終的に、2015年度からの英語のカリキュラムの実施に関して、「国際感覚を持ったエンジニアに相応しい実践的な英語の4技能（読む、聴く、話す、書く）向上」を方針とする新カリキュラムを2014年4月に答申し、4月のシステム理工学部教授会に報告された。

検討委員会からの答申を受け、その方針を具体化する作業を学部長、語学部会委員を含む教員、職員からなる英語カリキュラム改革全体会議にて行った。2015年度からの新カリキュラムの特徴は以下の通りすることを決定した。

- 1) 基礎的な一般英語の学習から始まり、理工系の実践的な英語に進む道筋を明確にする。
そのために、1年次と2年次の英語の授業を一新する。
- 2) レメディアルクラスを新設し、英語の基礎力が不足している学生の英語力の底上げを計る。
- 3) 3年次には理工系のプレゼンテーションや、語学検定への対策授業を新設し、卒業後に必要とされるスキルや資格を獲得できるようにする。
- 4) レベル別クラス編成とし、学生の英語レベルにあった学習ができるようにする。
- 5) e-learning を1, 2年次の授業で全面的に取り入れ、自宅学習時間を確保する。

6) 海外語学研修に参加することにより単位が取得できるような授業を新設し、海外英語研修への参加を促す。

7) 4年次に進級時の目標とする TOEIC スコアを設定し、学習目標を具体化させる。

8) 英語学習サポート室を新設し、英語の疑問や悩みを相談できるようにする。

2015年度は、上記特徴を具体化するために、以下の英語カリキュラムをスタートさせた。学外英語検定以外はすべて新設科目である。2016年度には、2週間程度の海外語学留学プログラムの修了者に対して、レポート提出などを組み合わせて1単位を与える授業科目である海外短期理工学英語研修Ⅰ・Ⅱをスタートさせた。

●英語カリキュラム

- ・1年次 English Basic Skills I （前期2単位）
 English Basic Skills II （後期2単位）
 English Advanced Skills I （前期2単位）
 English Advanced Skills II （後期2単位）
 English Remedial Course I （前期2単位）
 English Remedial Course II （後期2単位）
- ・2年次 English for Science and Technology I （前期2単位）
 English for Science and Technology II （後期2単位）
- ・3年次 理工系英語プレゼンテーションⅠ（前期、後期・2単位）
 語学検定対策講座（前期、後期2単位）
- ・学外英語検定Ⅰ・Ⅱ（前期、後期・各2単位）
- ・海外英語研修Ⅰ・Ⅱ（前期、後期・各2単位）
- ・海外短期理工学英語研修Ⅰ・Ⅱ（前期、後期・各1単位）

* 学生は卒業までに英語科目を8単位（選択）を取得することが卒業要件である。

1年次の English Basic Skills および English Advanced Skills はアカデミックな表現を可能にする教材を用い、2年次の English for Science and Technology は理工系の場面での表現方法を磨く教材を用いた。

1、2年次の英語授業ではレベル別クラス編成を採用している。TOEICの基準点に達していない学生は、English Basic Skillsの単位を取得に際して English Remedial Courseの単位の取得を条件とした。また、TOEICの高い基準点を超している学生に関しては、レベルが高いクラスである English Advanced Skills を履修するようにした。English Advanced Skillsの履修者は、成績においてはレベルが高いことを考慮し、成績が低くならないように加点した。English for Science and Technologyにおいても、レベル別クラス編成にした。

このようにクラス別編成に TOEIC のスコアを活用しているが、入学時に全員が受ける TOEIC-IP 試験以降の任意受験の学内 TOEIC-IP の受験率は低かった。この点を改善するために、2016 年度からは、1、2 年次科目の英語科目の成績に期末試験時に行われる学内 TOEIC-IP のスコアを組み込むことにし、各学期での受験を必須とした。その結果、本学部の 2016 年度の TOEIC 受験率は 1 年生が 99.6%、2 年生は 98.3%に達している。

TOEIC 受験率がほぼ 100%に達しているので、学生の英語の学力の変化を TOEIC で追跡することが可能となった。ただし、本学部の英語教育は、理工系の実践的な英語力を涵養することを目標としており、TOEIC のスコアの向上を目標にはしていないことに留意すべきである。

2017 年入学生では、入学時の TOEIC スコアの平均点が 402 点であったのに対し、2 年前期終了時には入学後 TOEIC ベストスコアの平均点が 473 点と 71 点上がった。2016 年入学生では、入学時の TOEIC スコアの平均点が 387 点であったのに対し、3 年前期終了時には入学後 TOEIC ベストスコアの平均点が 461 点と 74 点上がった。1、2 年生の英語授業により英語力が向上していると判断できる。

理工系英語プレゼンテーションの授業では、3、4 年生を中心に、高度な英語授業を進めている。履修学生が「グローバル人材育成教育学会第二回関東支部大会」で優勝するなどの成果をあげている。

海外英語研修の履修者は、夏のプログラムでは 2015 年度は 14 名だったが、2016 年度は 53 名に増加し、2017 年度は、海外英語研修が前期 33 名、後期 43 名、海外短期理工学英語研修が前期 28 名、後期 34 名の合計 139 名となり、海外での英語の集中的な学習が広がりつつある。

語学ワーキンググループでは、3,4 年次の英語学習について議論した。スーパーグローバル大学支援事業の一環として開催している TOEIC 講座への参加の呼びかけを 3、4 年生を中心として行った。

英語の新カリキュラムは 2015 年度にスタートし、その時の入学生が 2018 年度に 4 年生となった。新カリキュラムでは 3 年次から 4 年次に進級するときに TOEIC のスコアが 470 点以上であることを目標としているが、達成していない学生には新スーパー英語による e-learning を課した。対象者に対して、各学科の語学ワーキング委員が通知した。前期途中の TOEIC 試験を受けることを義務づけし、そこで 470 点以上をとったら e-learning を免除することにし、学生に周知した。

第二外国語・コースは、1年次では語学の基礎を学ぶ。かねてから学生より要望のあったスペイン語、フランス語を2008年に新設し、受講者の多い中国語の授業数を増やした。

本学部で開講していた留学生向けの日本語科目は、全学開講科目に移行した。

具体的なカリキュラムは以下の通りである。（根拠資料：「学修の手引」、大学ホームページのシラバス）

●第二外国語カリキュラム

- ・1年次 中国語 I・II、韓国（朝鮮）語 I・II、スペイン語 I・II、
ドイツ語 I・II、フランス語 I・II

* 学生は卒業までに第二外国語科目を2単位（選択）を取得することが、卒業要件である。

システム理工学部の卒業要件を満たすには、学生は英語単位を少なくとも8単位取得する必要がある。英語科目は、科目は選択できるが教員は選択できない。履修クラスは Web システム「S*gsot」で通知される。こうした手順に関しては、入学時のガイダンス等において学生に周知している。

3. 学生の受入れ

語学部会では、部会の理念・教育目標を実現するために、学生の受け入れに関して、以下の制度を整備している：

・英語のクラスに関しては、ペアワークやグループワークを中心としたアクティブラーニングを効率よく行うために、25人以下のクラス編成の実施を目標としている。非常勤講師の新規採用により2017年度は25名以下のクラスを目指した。その結果、前期授業の1クラス当たりの学生数は、1年生科目の English Basic Skills では最大20（前後期）名、English Advanced Skills では最大25（前期）と29（後期）名、2年生科目の English for Science and Technology では最大23（前期）と20（後期）名となった。大半のクラスでは目標の25名以下となったが、English Advanced Skills では25名を超過した。これは、English Advanced Skills の基準点の TOEIC スコア 450 点を超す学生が予想以上に多かったためである。そこで、2018年度より基準点を固定ではなく、1クラスの人数が適性になるように TOEIC スコアの分布を見て基準点を決めることにした。

・第二外国語のクラスに関しては、授業内容が、コミュニケーションというよりも、文法学習が中心なので、1クラス30人以下で学生の受け入れを実施している。

4. 学生の支援

2015年度より大学会館に英語学習サポート室を新設し、英語学習の相談に行くことができるようにした。火曜日から金曜日の昼休みから3時間ほど開室し、教育イノベーションセンターの特任教員2名の内1名が曜日ごとに常駐した。担当特任教員は English Remedial Course の授業も受け持っており、受講学生のレポートの指導などに活用している。また、PCを設置し、e-learningができるようにした。2016年度にはPCを3台増設した。特に、e-learningのサイトの利用方法の分からない1年生の来室が前期は多かった。2017年度の英語学習サポート室利用者数は、前期ではのべ1,616名、後期ではのべ1,169名と高い利用率となっており、学生は積極的に利用している。

英語の基礎学力が不足している学生に対しては English Remedial Course の授業を通常授業である English Basic Skills に加えて履修することを必須とし、英語の基礎学力の向上を支援した。English Remedial Course の配属になる TOEIC スコアの基準点は、入学する学生の英語力の上昇を反映させて、2015年度は260点、2016年度は280点、2017年度と2018年度は295点、とした。2016年度入学生では、リメディアルクラスの対象者である基準点295点以下の学生が入学時には67名いたのに対し、1年終了時には31名まで減った。レメディアル教育の成果により、英語の基礎学力が不足している学生の解消が進んでいると判断できる。

2018年度は聴覚障害をもつ学生が入学し、語学教育をどのように行うかについて本人と語学部会と学生課とで相談した。ペアワークやグループワークを中心とする English Basic Skills は、コミュニケーションが難しいとの判断から、English Basic Skills も担当している英語学習サポート室担当教員が英語学習サポート室で個別指導することとなった。特別な配慮を必要とする学生への対応という点に関しても、英語学習サポート室は重要な役割を果たしている。